

# 「エア・ウォーターの森」に込めた思い

エア・ウォーター北海道株式会社 庫元 達也

2024年12月、札幌市桑園地区で建築が進められてきた4階建ての建物がオープンし、ガラスカーテンウォール越しに大断面の木構造材を見ることができるようになっています（図1）。「エア・ウォーターの森」と名付けられたこの建物は、エア・ウォーターグループが計画を進め、建物の施主はエア・ウォーター北海道株式会社、設計・施工は株式会社竹中工務店が担っています。

このきわめて印象的な建物は、北海道の地域課題の解決に取り組む民間主導のオープンイノベーション施設であるとともに、北海道では他に類例の乏しい延べ床面積が6,000m<sup>2</sup>を超える大規模木造耐火建物でもあります。

そこで、この建物を実現した思いについてエア・ウォーター北海道株式会社の庫元達也社長に、木造耐火構造や活用した木材について株式会社竹中工務店の山崎僚平氏に伺いました。

まず、本稿では庫元社長のお話を紹介し、次いで別稿として山崎氏のお話を紹介します。

（文責：普及協会・菊地）



図1 エア・ウォーターの森

- 1階：レストラン・カフェ、キッチンラボ、ホール  
インナーガーデン
- 2階：オープンイノベーション、ラボエリア
- 3階：オープンイノベーション、コワーキングエリア
- 4階：エア・ウォーターオフィス
- RF：屋上ガーデン

## ■「エア・ウォーターの森」実現の経緯

今回、「エア・ウォーターの森」を建築したのは関連会社の本社ビルがあった敷地になります。これまで、更地のままで維持しつつ、地域的な特徴



を考えて医療・病院関係の複合施設としての活用を検討した時期もありましたが、2020年以降、エア・ウォーターグループが主体的に活用する方向となりました。併せて、北3条西1にあった旧本社ビル（旧ほくさんビル）を耐震性の関係で撤去したことから、その機能を移せる建物を確保する必要もありました。

1929年創業の北海酸素（株）から始まる当社は、もう少して100年を迎えます。その節目となる時期を前に、おおむね成熟している現在の事業に代わるような次の100年に向けた事業の種を創出することを議論しました。

北海道は、「全国の10年先に行く課題先進地」という言われた方がるように、将来に関わる課題が多い地域です。そのような北海道のエリアで、地域の資源を使って何かを生み出し、それを事業化できれば、その知見や製品、システムは北海道の中だけではなく、日本全体に、そしてグローバルに出していけるに違いない・・・。このような議論の中で、「オープンイノベーション施設」、というアイデアが生まれ、その構想実現に向けた計画が動き始めました。

エア・ウォーターグループは、2019年4月・兵庫県神戸市に、2023年9月・大阪府摂津市に、健やかな「暮らし」を創造するためオープンイノベーション施設をオープンさせています。また、エア・ウォーターグループは、多くの企業と共同研究を進め、新しい製品やシステムを開発することをさまざまな領域でやってきています。北海道での例の一つあげると、帯広で製造している液化バイオメタンを、大樹町で液体燃料ロケット開発を進めるインターステラテクノロジズ（株）に供給する事業を進めています。

また、2024年1月の社内報で、エア・ウォーターグループの豊田会長が、「変わらないリスク」よりも「変わるリスク」を取る」と述べています。一步踏み出さないと得られるものも得られません。エア・ウォーターグループには、北海道に限らず、数多くの関連企業が首都圏および関西圏以外の地方圏にあります。それらの地方圏エリアでは北海道エリアと同様に将来の地域産業に対する危機感があります。アクションを起こさないといけない、待っているだけでは生まれないという危機感があります。

以上のような他機関との連携の積み重ね、そして現状に対する危機感が、「エア・ウォーターの森」につながっています。

「エア・ウォーターの森」にはエア・ウォーター北海道だけではなく、エア・ウォーターグループの開発系社員が集う場になります。そして、社外のスタートアップ企業の方々とディスカッションできる場となります。そこで生まれた成果が外に出て行けば、エア・ウォーターという存在が広く知られるとともに、社会貢献しているという企業というPRにもなります。そして、成果を生み出す拠点となった建物が注目されることでしょう。

なお、旧本社ビルにあった機能の全てを「エア・ウォーターの森」に移すわけではありません。従って、本社ビルが桑園に移転する、という表現は当を得たものではありません。あくまでもモノを生み出すことを主眼にした建物で、主に企画系、開発系のスタッフが集まることになっています。

### ■「エア・ウォーターの森」を木造とした訳

当初から木造に着眼していたわけではありません。ただ、オフィスは兼ねるものの自社以外の方々も集う建物とするとき、鉄筋造のビルでは特徴が出せないと感じました。そして、木材を使うことで建物の特徴を出せるのではないかと、北海道に建てるのだから北海道の林業に貢献できる木造はどうだろうか、と考えました。エア・ウォーターグループでの建築実績があった竹中工務店からは、耐火集成材「燃エンウッド（編集注：山崎僚平氏の記事で詳述）」を用いれば、ほぼ100%



道産材で建てられるかもしれない、と伝えられました。そこで、北海道に貢献する意味も含めて木造で進めることを判断し、エア・ウォーター本社の役員会で承諾を得ました。

規模の大きい建物を木造で建てるに当たっては建築費がひとつの課題になります。当初、竹中工務店からは、木造は鉄骨造より2割ほど掛かり増しになると伝えられました。ですが、それはおおむね許容範囲内にあったこと、森林資源が豊富な北海道に建てること、さまざまな社会課題の解決に取り組むエア・ウォーターグループの象徴となる北海道らしい建物とすることを考えたとき、北海道の木材を使った建物がふさわしいと判断しました。

その後、最初の見積もりより木材の価格が多少上がったことで建築費用は膨らみましたが。スチール系資材の値上げ幅が木材よりはるかに大きかったため、結果として木造で進めて良かったと振り返っています。

### ■オープンイノベーションフロアでの計画

2階のオープンイノベーションフロアには、たとえば下記のような研究者・研究機関に入居していただきます。

・北海道大学特任教授  
吉野正則氏

プラチナ触媒技術を用いた野菜の鮮度保持に関する技術開発

・北海道大学教授 川村秀憲氏  
AIに関わるプロジェクト

さらに、北海道国立大学機構（小樽商科大学、帯広畜産大学、北見工業大学）や室蘭工業大学も具体的な計画はこれからですが入居されます。

3階のコワーキングスペースには、いくつかの道内企業の入居が決まっています。

エア・ウォーターグループは、創業の地のひとつである北海道でのネームバリューはそれなりにあると思います。そして手がけている産業領域が幅広く、相手企業がどのような事業領域でも関わりを持っている点で、既存のオープンイノベーション施設とは違う特徴を持っているのではないかと思います。オープンイノベーションフロアやコワーキングスペースに入居いただく事業体のお考えを全て把握しているわけではあり



ませんが、エア・ウォーターグループの力を借りて何かをできるのではないかと、という思いで相談いただいているケースが多いのかもしれませんが。当社の方にも、なにか創造できないかと一緒に議論しましょう、という雰囲気があります。

なお、オープンイノベーションフロアの入居者に、エア・ウォーターグループと関連する事業体だけを集めるのではオープンイノベーションの趣旨にそぐいません。エア・ウォーターグループとは絡まないかたちで、入居者同士、入居者と外部機関が組んでいくのは多々あると思います。

### ■つながりの場としての「エア・ウォーターの森」

「エア・ウォーターの森」と直接関係することではありませんが、エア・ウォーター北海道では2023年から北海道の179市町村を対象とする寄付プログラム（ふるさと応援H（英知）プログラム）を始めています。



2023年度から2030年度までの8年間で総額10億円を自治体に寄付するものです。2023年度は応募期間が短かったものの46市町村から51案件の応募をいただき、18市町村の18課題に対して総額1億1300万円を寄付しました。たとえば、林業に関わる課題として、占冠村から提案のあったカエデの木からメープルシロップを採取する事業を採択しています<sup>1)</sup>。

2024年は前年を超える応募をいただいています。ふるさと応援H（英知）プログラムの発足当初、「エア・ウォーターの森」との直接の関係は持たせていませんでした。ですが、自治体との産学官連携を進めるというコンセプトがあり、ふるさと応援H（英知）プログラムによらず、自治体に施設を使ってもらうことを当初から折り込んでいました。2年目の事業採択と「エア・ウォーターの森」の稼働のタイミングが合ってきていますので、活用してもらうことも期待しています。もちろん、寄付を使った事業を「エア・ウォーターの森」で、ということも可能です。

「エア・ウォーターの森」は建物を建てるのが目的ではありません。イノベーションの場であり、そのための他機関とのつながりを生み出すための場です。オープン後、トライアンドエラーで運営していくことになるのだろう、という自覚はあります。事業を広げていく拠点として「エア・ウォーターの森」を発展させていきたい、そのために大切なのは機能を充実させ続けることだと考えています。

### ■参考資料

- 1) 占冠村：カエデから採取できる樹液を村の特産品「メープルシロップ」にする事業、<https://airwater-hprogram.jp/#2023-shimukappu>.